



MiTe

◆詩と批評◆第156号◆

2021年◆秋◆季刊

【山形国際ドキュメンタリー映画祭記念特集】

金野孝子 Kinno Takako 木村朗子 Kimura Saeko

小国綾子 Oguni Ayako 川添彩 Kawazoe Aya

◆ ◆

川瀬慈 Kawase Itsushi

笠間直穂子 Kasama Naoko

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

イナン・オネル Inan Oener

ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles

新井高子 Arai Takako

◆ ◆

・本・

〈詩集〉川瀬慈『叡智の鳥』Tombac (1760円) **新刊!**

金野孝子『山吹』私家版、岩手開発産業株式会社印刷

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (2420円)

新井高子『ベットと織機』未知谷 (2200円)

〈翻訳小説〉モーパッサン著、笠間直穂子訳『わたしたちの心』岩波文庫 (924円)

〈評論〉木村朗子他編『世界文学としての〈震災後文学〉』明石書店 (5940円) **新刊!**

小国綾子『?が!に変わるとき——新聞記者、ワクワクする』汐文社 (1540円)

樋口良澄『鮎川信夫、橋上の詩学』思潮社 (2970円)

〈訳詩集〉イナン・オネル訳『アタオル・ベフラモール来日記念詩集』私家版

・お知らせ 1・

映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』が、山形国際ドキュメンタリー映画祭2021(オンライン開催、10/7~10/14)の「アジア千波万波」部門に入選しました。本作の上映は、10/9(土)11:00~(アフタートーク付)、10/12(火)18:00~。1300円。<https://www.yidff.jp/home.html>

・2・

シンポジウムと朗読会「詩の翻訳、詩になる翻訳」(主催・早稲田大学)

10/15(金)13:00~17:30 開催方式: Zoom Webinar(無料、要申込) *出演者は会場集合

出演: 伊藤比呂美、菊地利奈、柴田元幸、藤井一乃、四元康祐、榎木伸明、大崎清夏、川口晴美、マーサ・ナカムラ、蜂飼耳、新井高子。<https://www.waseda.jp/inst/sгу/news/2021/09/27/10032/>

・3・

エクアドルの第14回 Ileana Espinel 国際詩祭(オンライン、11月開催)に、新井が出演します。

・4・

管啓次郎の仕事の評する英文論集『Wild Lines and Poetic Travels』(Edited by Doug Slaymaker, Lexington Books)に、新井が詩の分析を寄稿しました。

・5・

樋口良澄が、『現代詩手帖』8月号(思潮社)の特集「荒地」から考える」の鼎談「戦後詩研究の射程」に、瀬尾育生、田口麻奈とともに参加しました。

・6・

映画『東北おんばのうた』が、岩手県宮古市のシネマリーンで上映されました(8/28)。

・7・

トリーア大学(ドイツ)の詩歌研究会(オンライン、9/9)で、リース・モートン、大村梓、新井が英語による発表を行いました。

【後記】小国綾子さん、川瀬慈さん、川添彩さん、木村朗子さん、金野孝子さんに寄稿頂きました。

編集: 新井高子 / 発行所: ミテ・プレス / 発行日: 2021年9月30日(木)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称)ミテノカイ

E-mail: mite@ace.ocn.ne.jp <http://www.mi-te-press.net/> 「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

待ちながら

金野孝子

〈帰る〉

この言葉をわすれたのだろうか
三・一に まっ黒い波と
行ったままのKちゃん
もう 十年が経った

あの日の幾日か前

その洋品店は

いつものように平和だった

「このブラウス着てみて」

「派手だよ もう傘寿だもの」

「大丈夫だア ふたりにイ百歳^{ひゃく}まで

生きるべし」

袖を通しながら

姿見に歳をわすれたひととき

ふたりの弾む話には

遠くはないけれど未来があった

ああ 会いたい

そうだ あの日のお店を覗こう

それは 洋服ダンスから

俄かに わたしを招くブラウスたち

彼女の笑顔で 彼女の声で

〈Kちゃん どうさいるのオー

はやぐ帰ってきてエー

これがらさア

あんだア着せでけだ服ばかり着て

待ってるがらねアー

彼女に包まれながら

〈帰る〉 日を

今日も わたしは待つ

*あんだア着せでけだ服ばかり着て..あなたが着せてくれた服ばかり着て

【山形国際ドキュメンタリー映画祭入選特集】

岩手県大船渡市のみなさんにお力添えをいただいた映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』（監督・鈴木余位、企画制作・新井高子）が、世界的に知られる山形国際ドキュメンタリー映画祭の「アジア千波万波」部門に入選しました。そこで、ご出演の金野孝子さんの詩、映画監督の川添彩さん、ジャーナリストの小国綾子さん、文学研究者の木村朗子さんの映画評による記念特集を組みました。（新井）

輪郭の忘失／のあ・と／皺

川添彩

フレームいっぱいにおんばの言葉が映し出され、輪郭がぼんやりとしたやさしい音が耳に入る。どうやら「春が見えた日」と言っているらしい彼女の発する振動で頭が揺れた。

東北おんばの詩から始まるこの映画は、彼女たちの音とリズムからなる言葉が口で紡がれ、手で紡がれる。土地言葉から鳴る音の振動、その波紋の拡がりに、私と同じく標準語で自らを振舞う観客は、彼女たちの「言葉のよななもの」に揺蕩いながらその身が拡張していくことを知るだろう。文字の輪郭だけでは理解し難く、その音とリズムから、視覚にも情景そして語り手である彼女たちが拡がる。監督であり撮影者、ともすればこの映画の視点でもある鈴木余位さんは、フレームいっぱいにおんばの声を生み出すその身体をじつと凝視め、よくよくじつとその音を視ることにしたのだと思う。

よくよく視ようとする。視点・カメラは撮影者の鼓動で震える手を通し、呼吸をしながらおんばが紡ぐその声を視る。波紋の拡がりて揺蕩い波の中心からゆっくりと流されていくその身をぐつと集中させて、視点・カメラはどんどんとおんばへ焦点距離を延ばしていく。焦点距離は延びていく、その頃にはもう、視点●カメラはおんばの顔でいっぱいになっている。

あの音を、そのリズムを生み出す呼吸を、その身体の動きを振動を、よくよく視る。その音に刻み込まれた言葉の痕／皺が、陽や風に晒された肌が、空気に触れ渾く眼に浮かぶ海が、そこに在る。

もう誰かに抱き抱えられ、その腕で眠ることはないし、そのようなことが自分自身に在ったのかどうかにもわかには信じ難い。けれどこのフレームいっぱいのおんばたちとその身体から響く振動にどうやら自分の時間はそこに在ったのだろうと、遠くの眺めに自分をみる。

映画は石川啄木のうたで交差する。企画者である新井

高子さんとおんば達の声がそれぞれの音を透過させながら重なり交差する。文語と土地言葉、標準語とケセン語。それぞれに振るわせてきた言葉の痕がそこに画を生む。音が視える。そして、おんばはその身を震わせ長い時間をかけて生んだ自分たちの皺を一つ一つ丁寧に語り始める。その語らう自線のその先は記憶の自分。とても近くとても遠い自分への視線、自分の眼の先を視る。おんばの凝視めるその先の（ぐるりと返した）その奥を私たちは視る。

「私の人生辛かった」

三度の大津波を経験しているおんば達が語る自身のいま現在ここに居ることとここに在ること。瓦礫にまみれた街の写真を、どんなによくよく視れば、あの時、陶芸教室で作ったお椀が在る。瓦礫はガレキではない。よくよくよくよく凝視める。そこに生活が在る。そこに誰かが生きて在る。お地藏さんのようなものも、じつと凝視めればちっちゃな石粒、時間になる、そこに在って、ぼんやりしてなんだか溶けていつているように思えてきた。おんばの恋バナを聞いたり、音頭をとったり、皆唄う。ふと自分に皺を増やして、そこに置いてみる。ああ私はこういつた時にみんなでどんな音頭をとって、どんな唄を唄えるのだろう。なにもないな、なにもないのか。

よくよくみるのだ欲望の人、その視点●は輪郭の忘失。しかしそれは紛れもない孤独。よくよく、刻み込まれたその皺々に覆われしかの人をみよ。なみなみ波打つ言葉が揺れる、皺々の、じつと凝視 フレームいっぱいの■。視点のその眉間には皺の兆し。広い額に成る粒が皺の萌しに染み渡り、行き渡りついで視界■をぼかす。

分け隔てられぬよ。寒い時の海みたいだ、ぼんやりあたたかくて自分を支える輪郭忘れちゃう、みたいな？でも、在る。余位さん、私たちも皺々になりますか。

■□■□■□■□■ああ。

身体が拡大していく、画面いっぱいには、口が開く。彼女たちの言葉が彼女たちの言葉でしかないように皺がよ〜く視える。冥が終わる。

チャップリンの作品は大抵、背中を見せ歩く姿で映画の幕が閉じる。歩き続ける。その先に道がある。続く。そんなつまらないことを言いたいのではない。けれど、もう少しだけ歩こうか。おんばの凝視めるその先の（ぐるりと返した）その奥を私たちは、スクリーンのその先の、裏側の、闇の。歩き続ける。音頭の拍子を取りながら歩き、続く。

誰も、何も、東ねない映画

——『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』によせて

小国綾子

ドキュメンタリー映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』（鈴木余位監督）を初めて見たとき、「この映画の『主人公』は、おんばたち一人一人の『ケセン語』なのかも」と感じた。言葉が主人公、なんて変かもしれないけれど。

二〇一七年、映画のきっかけとなった『東北おんば訳 石川啄木のうた』という一冊の本と出会った。詩人の新井高子さんが東日本大震災後、「詩や言葉で何かできないか」と大船渡市の仮設住宅で地元のおんばたちに「先生役」になってもらい、石川啄木の短歌一〇〇首を土地言葉に訳したのをまとめたものだ。

「ふるさとの訛(なまり)なつかし」も、「ふるさとの訛(なまり)懐(なつ)がすなあ」と言われれば、まるで啄木と出会い直しているようで、土地の言葉って何と豊かなんだろう、と思ったものだ。

本の中の「ケセン語」は、おんばたちみんなで選んだものだから、書名も「東北おんば訳」。「おんば」は言わば集合名詞だ。

その点が、映画は違う。本では集合名詞だった「おんば」たちが、映像の中で、それぞれの個性を持って生き生きと語り始めるのだ。言葉もまた、一人一人ですりすり違(ちが)う。

新井さんの比喻がいい。「標準語は『既製品』。服のサイズに自分の体の方をあわせる。おんばたちの言葉は『オートクチュール』。自分で作って、自分で染めて、自分で仕立てた一点もの。(略)あつらえものの着物のように、自分の実感をそのまま言葉に乗せられる」

映画に登場するおんばの一人、金野孝子さんの言葉には圧倒された。彼女は土地言葉のことをこう表現する。「心の形ではなく心の息吹き。だからケセン語だと簡単に詩ができる」。

それは人生と深く結びついた「自分だけの言葉」だ。

東日本大震災の後、新聞記者の私は震災を報じることの難しさに随分と思ひ悩んだ。「被災者」「被災地」という言葉に戸惑った。そんな名前の人はいない、そんな名前の土地はないのに、と。それでも字数の限られた記事の中では、それらの言葉を使わざるをえない場面があった。それが悔しかった。

「誰も何も東ねない記事が書きたい」と模索した。

私がこの映画に惹かれたのは、「東ねていない」からかもしれない。おんばたちを「東北おんば」と東ねない。彼女たちの話す言葉を「ケセン語」と東ねない。彼女たちの言葉はそれぞれに少しずつ違っていて、しかも、話す相手によって、生きもどのように変化するのが。

金野さんには二度、電話でお話をうかがった。彼女は新井さんと石川啄木の短歌の「東北おんば訳」に取り組んだ日々について、「この土地の息吹を引き出してくれた」と振り返った。「私たちが普段恥(は)ずかしがっている土地言葉を、思う存分語らせてくれた。被災者の心をひらかせ、笑顔にさせてくれた。それが何よりの被災地支援でした」。心に残る言葉だった。

こんなに豊かな土地の言葉を「恥(は)ずかしい」と思わしめたのは何か、と考えてしまう。この国では、方言は長く軽んじられてきた。沖縄の学校で、琉球語を話した生徒は、罰として「方言札」と書かれた木札を首に下げねばならなかったそうだ。昔の話ではない。『子ども東北学』の著者で宮城教育大准教授の山内明美さんは私より若い一九七六年生まれだけれど、同書で小学校時代に作文の方言を教師に赤字でたたされた経験を明かしている。「子どもたちの将来のために」と、土地の言葉が教育現場で矯正の対象とされてきた歴史は重い。

二〇〇五年だったか、「方言ブーム」が話題になった。各地の方言を新鮮で面白いと感じた東京近辺の女子高生たちが、携帯メールや会話に使い始めたのだ。方言はもはや「恥(は)ずかすべきもの」「矯正するべきもの」ではなくなった、と当時は好意的に報じられた。

でも本当にそうだろうか。方言が「アクセサリ」のように、マジョリティーによって消費された側面がなかっただろうか。たとえどい大坂なおみ選手の日本語を「かわいい」という風潮にもどこか重なっていないだろうか。

「言葉は文化だ」。そんなフレーズが映画の中で何度か出てくる。土地の言葉を尊重するとはどういうことか。誰も東ねず、一人一人の言葉に耳を傾けるとはどういうことか。そんな問いへの答えが、この映画の中にあると感じる。

映画の中で明かされる、「ひとつ」をめぐるエピソードが好きた。

啄木の、〈何か一つ／大いなる悪事をしておいて、／知らぬ顔してゐたき持かな。〉を訳していた時、新井さんが、若手のおんばの声のしたがつて「ひとつ」と黒板に書いたら、年長のおんばから「何が『ひとつ』だ？」「『ひとつ』だべー」と言われたそうだ。「大いなる悪事」なんだから、もつと重い「ひとつ」だ、と。

重い「ひとつ」と軽い「ひとつ」があるのか！ 私は、土地言葉の表現力の豊かさにたまげた。考えてみれば、標準語だって「たった一つのいのちの『ひとつ』と、『ひとつよろしく』の『ひとつ』の軽重は違う。ケセン語ほど豊かに表現しきれないけれども。

五人のおんばの豊かな語りを映像作品に残してくれたことに感謝しながら、私もいつか、その人だけの言葉の響きや色合いまでをすくい上げられるような記事を、できることなら言葉で書いてみたい、と願う。

私たちの声を聴く

——鈴木余位監督

『東北おんぼのうた——つなみの浜辺で』について

木村朗子

新井高子編著の『東北おんぼ訳 石川啄木のうた』（未來社、二〇一七年）は、石川啄木の歌をケセン語に訳したものだ。これは詩人の新井高子さんが二〇一四年から二年間、津波の被災地である岩手県大船渡市の仮設住宅に通って、そこに集った「おんぼ」たちとつくりあげたものだという。震災後、ボランティアや慰問の企画がさまざま立ち上がり、音楽会や美容イベント、マッサージなどが避難所や仮説住宅で行われていたとき、新井高子さんが詩人としてなにかしたいと思ったとき、岩手出身の有名な歌人、石川啄木の短歌をケセン語に訳してみようという企画を思いついたのはわかるとして、そうした文学的なイベントに参加したいと思った「おんぼ」たちというのはいったいどういう人なのだろうと思っていた。短歌鑑賞会ならいざしらず、翻訳とはいえ、うたを実際につくるイベントに参加したいと思う人たちというのは。

鈴木余位監督『東北おんぼのうた——つなみの浜辺で』（二〇一九年公開）をみてその謎がとけた。大船渡で、本の出版記念を行い、新井高子さんがおんぼたちにあらためて話をきいて撮ったドキュメンタリーである。映画は、金野孝子さんの自作の詩「春ア見（め）えだ日」の朗読で幕開ける。金野孝子さんは、津波でなにかもがさらわれたあと、がれきの合間に黄色い水仙の花が咲いているのをみつけたと書く。詩の最後はこうして閉じられる。

おらア、春みだア、しっかどみだア

人間の時間は被災のあの日にどどまっているころ、季節は確実にめぐって春の花が芽吹いていた。その驚きは再生への希望へとつながっていくようだ。金野孝子さんは、母親の影響で本ばかり読む子として育ったのだという。文学少女である。規則がきっちりきめられた標準語とはちがって、土地ごとばでなら自然と心の思うことがことばになるのだと話す。金野さんはすでに土地ごとばで書く詩人なのだ。

斎藤陽子さんもまた学校にある本はすべて読み尽くすような文学少女だったが、本を読むなどよくなものではない、女に学問はいらないと祖父に言われながらもなんとか説得して高校へあがったのだと話す。当時高校にあがった女の子は五人しかいなかったという。そんななかで教育を受けたという自負が斎藤さんにはあるだろう。斎藤さんは歌人だ。

全壊の母校の跡地秋さくら津波に負けじと咲き広がれり
生きでたか生きでたよと抱きあいて震災後の人混みの中

岩淵綾子さんもまた短歌を詠む人である。悩みや人にはいえないことを歌によむことで想いを表出できたのがよかったと話す。

大津波にとどまりゐたる我が命復興見つ生きるも務め
老木に可憐に咲ける梅の花わが行く道を論すがごとく

映画では、こうしたおんぼたちの自作の詩歌のあいまに、石川啄木歌のおんぼ訳が金野孝子さんの朗読で流れてくる。実に、全編をとおして詩歌のことばが横溢する映画なのである。

二〇二〇年一〇月二七日に津田塾大学でこの映画のアフタートークセッションとして、監督の鈴木余位さんとプロデューサーで出演者の新井高子さんをお招きしてお話をうかがったとき、鈴木監督が震災の映画にはしたくなかったと話していたのが印象的だ。実際にこの映画には、新井高子さんが聞き出す、おんぼたちの大船渡での人生が封じ込められている。そこには被災の記憶も入ってはいるのだが、もつと遠い昔の戦争の時代へと遡る記憶でもある。

印象的なのは、嫁としての苦労話よりも、どんな少女時代を過ごしてきたかについて語っているところだ。こうしてみると、詩歌に親しんで、それも土地ごとばで書く人々がいるところに、新井高子さんが石川啄木歌のおんぼ訳の企画を持ち込んだのだとわかる。その企画は、本が好きで勉強したいと思っていた少女時代を思い起こさせるものだったにちがいない。そうしてまるで少女にかえったようにウキウキと楽しんだのだろう。

津田塾大学でのイベントには「東北の声を聴く」というタイトルをつけていた。しかし、実際にこの映画から聞こえてくるのは私たちの声なのだ。撮影時一〇〇歳の今野スミノさんや九四歳の三浦不二子さんなどにいたっては、大船渡で一九三三（昭和八）年には昭和三陸地震津波、一九六〇（昭和三五）年にはチリ地震津波、そして二〇一一（平成二三）年の東日本大震災と三度も津波を経験しているという。何度津波にやられても同じまちに家を建ててきたという。幾度もこのまちの復興をみてきたはずだ。それでも被災地の復興過程での意思決定に私たちはかかわってはいないのではないかとという気がする。あるいは私たちの話聞かれないままだったのではないか。あるいは私たちの話す戦争の経験もまた聞き届けられてはいなかったのかもしれない。慰問の手紙を書いたり、竹槍の訓練をしたり落下傘をつくったりしていたこと、召集令状や戦死の通知を伝える役目がどれほど嫌だったかという話。

新井高子さんが開いたものは、女の人生からみる歴史だ。こんな話をおんぼたちがしてくれたのも、まるでおんぼたちの孫のようにかわいがられている新井さんが聴き手だからに違いない。おんぼたちの歴史語りは、全編に流れる詩歌のことばと響き合う。話の機微を逃さない鈴木余位監督の編集で、私たちの声は一編の詩のようにしてわたしたちに届けられたのである。

どんぼらの淵

川瀬 慈

どんぼらの淵にはな

ノシちゆう そりやあでえれおそがいもつけが住んどりんさるんやと
とおрикかったジンをひきずってどんぼらの淵に沈めてな

けつあなからのこをひきぬくんやと

ひきぬいたのこをな

なぶってねぶって なぶってねぶって

のみこみんさるんやと

だまくらかしとらんで

ノシんたあにつかまってまったらな ちゃつとにげたらあかんのやて

ちから抜いてな 淵の奥の奥までひきずられて行くんや

めえつぶっておとなしゆ ひきずりおろされるんや

淵のいちばん底ついたらな

なまんだぶ なまんだぶって ちゃつとおがむんや

ほしたらな ノシがふーつと 力ゆるめんさる

そんなとき底をでえれえおもいつきりけりやあ

ほんで ふわーつとうえにあがってくんやぞ

どんぼらのくろできこえるひぐらしの声はな

ノシんたあのうめきごえなんやと

わしらはこっちや わしらはこっちや

おまはん わすれとらんか

おまはん わしらをわすれとらんかっちゆうな

ノシんたあはいわした

最近のジンは祈らんし 祀らんし でえじなことてんで忘れとるげ

川ざらえ あんばよやらへん

地藏盆 あんばよやらへん

オシヨウライさん迎えんし送らん

そんなかわり山削って川削る

毒たんとたべて毒たんと流す

ジンののこはな　でえれえまずてまずて
てんでくえんと　てんでくえんくなつてまつたんやと

どんぼらのくろのひぐらしの声はな

ノシんたあのうめきごえなんやとさ

わしらはこつちや　わしらはこつちや

おまはん　これはええんか　これはええんかと

両手あわせて　拝むようながしんさる

おまはん　わすれとらんか

おまはん　わしらをわすれとらんか

註　本作は、岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲下長瀬地区のノシに關わる伝承に基づく

ブレイクソング

ジェフリー・アングルス

栄えることの反対は

衰えるではなくて

沈滞することである

日ごとに伸びていく今の中

私たちを囲む枠組みを踏み出さない

毎日の小さな出来事を足しても

達成感には届かない日々

この世には ものを計るために

新しい計算が必要になる

単純な足し算は足りない

例えば 隣の部屋のあなたと

ここにいるわたしの距離は

上がっていく等差数列ではなくて

収束しない級数で数える

耳を澄ませば 歌が聞こえる

和声をつけない単調の旋律

歌詞は何も言っていない

待ちなさい とくり返すだけ

山火事が消火されるのと

我々の失敗から学ぶのとなを

距離がこのまま増え続けたら

お互いにいつまで聞こえるだろう

終わる前に 声が消えるのか

(下がる音量も等差数列に

沿っているではないのか)

結局 私たちの音楽が

このように肅然と終わるのか

それなら その前 無理でも

私の消えかかった声はまだ

届くところに戻って欲しい

慰めてくれる安らぎの数式を
今 考えてみるから
そして 寝室に連れて行って
小さな声で耳元に歌う
数字のない、私たちしか
分からない言語で

あんたのものでアねアでしょう、川は。たとえ敷地サ流れておっても、どうしても来るわけでしょう。言うことなんぞ聞かんでしよう、つたうときも枯れるときも。同なしだよ、あんたアの眼から漏れでなければ。

潤むよねえ。悲しゅうて悲しゅうて、しゃぐり上がってくるよねえ。だアども、その悲しみて何ですか。突き動かされて、流しておるのでねえのすか。ただただ流れておるのでねえのかや。

繋がっておるのだアもの、川みだいに、川曲みだいに。あんたと、あたしと、だれかさんと、だれかさんと、結んでおるがよ、涙腺は。

なアに、見えないものばかりのために、振りまわさるサガでしょう、にんげんア。いつだって、そうでしょう。見えない川バ流れて、鳥の眼で見下ろしやア、透きとおった迷路が巡る、いちめに。だアもの、いぐらか濡れておるがや、瞳というの、いまだって。

ほうして、亡くなるモンのあるときやア、人なんて、踏みはずしやア、パ——ッと落ちてしまいますから。泳ぐこども、飛ぶこども、爪立てで這い上がるのもできんだアもの。パ——ッと、落ちて、小石の広げる波紋のどくどく波が立つ。

だから、

だれかの身代わりなんだよ、

泣くというのは。

なみだの川サ転がって、濡れたモンらの人波が、寄せて、溢れてくるのだアもの、あんたアのその目から。

母さんが死んだとき、泣きました、号泣しました。生きたくて生きたくて、朝に晩に、むしやぶりついていたひとだから、鯉節に。

薄すくなってくじぶんの血精が、焦れたくて、おつかなくて。なアに、ほんとうはもう踏みはずしておったども、

化けたがよ、

虎猫に。

あたしが削る鉋のしたへ、腹ぼうて、舌ツツ込んで。口の端からオツこぼすほど、喰らっておったつきやあ。ギイツと爪立て、しがみついておったがですよ、その岸壁サ。

「血合いバたんとの背節やアよこせえ」って、

髭やア揺らしてねえ。

あつら蟬の鳴く夏に、輸血みだいに掻いとったの、あたしア、くる日もくる日も。そいでもそいで
も、しんしん瘦せる母さんは、

「きょうも、おまいはケチしたにやあ。にんべんのと書いたのに、よろず屋の見切り品にやあ、こ
の鯉節やア」。八重園サそれを絡まして、毒づいて。三白眼の青ぐらゝがびっせつせつゝねア。

ほうして、とうとう二十日めに、流さいてしまったたあ。

ぎやあごろ、ぎやあごろ、川でも叫えでおったれば、あたしが泣くほかねアがしよう、岸辺に佇っ
て、ぎやあごろ、ぎやあごろ。

その声だよ、

仏さんバ出たときやア、

あんたアも唱イたがしよう。

羯諦、羯諦、

うちの母さん弔らうて、泣いでくれしやったがしよう。

詩人アフメッド・アダの四編の詩

訳 イナン・オネル

恋愛 二十七

恋人よ、これから行くよ、片側が海で
片側が緑の山のオルドゥへ
何冊か本も持ってね
友達に詩を読みあげるかもしれない

恋人よ、あなたの足は雀の飛び方
鳩の近づき方、あなたの胸は
あなたは夏の空のようだ
頭をわたしの方にもたれて、わたしの手を
とって、行くよ緑の丘へ

恋人よ、帰るよアゼル・ヤランへ
トルコ語の神聖な頂きへ
今日はわたしたちは二人ともアゼル・ヤランド
花を供えよう、その墓へ

恋人よ、わたしたちは生命に形を与えている
海のカギはわたしたちが持っている、さあ
行くよ花束や薔薇の間を
祭りだ、あなたと一緒にいることは

恋愛 二十八

わたしは恋愛の陰に残った、恋人よ
あなた以外にわたしには平和がない
しかし、あなたの深い瞳の
影響がある、わたしの放浪の人生に
わたしは敗れた、あなたの身体に負けた
最も深くへ降りた、一滴また一滴
何度も飛び回ったあなたの瞳の中で
疲れてあなたの横に横たわった

埃をかぶった私の身体は、恋人よ
あなたからもらった恋愛の色を、赤を
また赤を、また
それをあなたの最も溢れる側に置いた

恋愛 二十九

あなたの笑いにも悲しみがある
落雷を受けた樹木の悲しみ
折れた枝、切れたワイヤーの悲しみ
急に別れた人々の理由のない悲しみ

そのあなたが持っているのはわたしたちの歌の悲しみ
止まった時計の悲しみ
独りでダンスを踊るバレリーナの悲しみ
指の上で飛び回りそうなきときの

小川へ、海へ、空を積んだ塚の上へ
飛んでいく心であっても役に立たない
消えないあなたの唇の髣髴から悲しみが
あなたの顔の泡立つ悲しみ

あなたの触るものは悲しみだ
あなたが抱いた樹木は悲しみ
あなたの視野を通る鳥は悲しみの

恋愛 三十

三十篇目の恋愛の詩、三十羽の鳥になっていった
チューチューと鳴く空へ

あなただ、絶えず探す宇宙の神秘を
あなただ、あなたに戻る三十羽の鳥
あなただ、海の呼吸
あなただ、灰から生まれる解放

ああ、恋愛よ、チューリップの球根、香り立つ薬草
様々な鳥、牡牛の目、盲目の
祈り、川や雷
総てが存在のもとへ辿り着く

ああ、恋愛よ、わたしは見たあなたを若い
女の子の飛び回るスカートで、
昇る太陽の飛び散るハンマーで、
ポプラの騒めきで、丘の上で
心から心に届く
あなたの大きな瞳は

あなただ、三十羽の鳥
あなたに誰も似ていない

向かいの歩道で

笠間 直穂子

『地に呪われたる者どもより——闘争の声
一九六九—一九八八』という、二〇一八年に発
表されたアンソロジー盤は、画期的だった。ラ
ッパのロセが発案し、歴史家の協力を得て編
まれたコンピレーションで、フランスおよび、
かつてフランスの植民地だった地域出身の音
楽家たちが、独立した国々の苦悩と希望、なお
もつづく植民地主義の構造、移民に対する人種
差別などを歌った歌が集められている。

珍しい音源が並ぶなかに、ピエール・アケン
デンゲ（一般に「アケンデンゲ」と訳されてい
るのだけど、「アケンデンゲ」が正解だと思う）
の「向かいの歩道で」が収録されている。ガボ
ン人で、「ワールド・ミュージック」隆盛以前
から、欧米とアフリカ、両方の民衆音楽を参照
して曲作りをしていた、現代のアフリカン・ミ
ュージックの先駆者にあたるミュージシャン
だが、デビューを後押ししたのはピエール・バ
ルーだった。松山晋也『ピエール・バルーとサ
ラヴァの時代』によると、アケンデンゲはある
日突然サラヴァを訪れ、カセットテープで自作
曲をバルーに聴かせたそう、バルーは、「自
分の国や文化のことをまっすぐに歌った」歌詞
に強く惹かれ、アルバム製作を決めたという。
「向かいの歩道で」は一九七四年のデビュ
ー・アルバム『ナンディポ』の一曲。サラヴァ・
レーベルだから、「レア音源」というわけでは
なく、それどころか、にむらじゅんこの対訳が
完備された日本盤も出ているのだけど、あらた
めて、アフリカが置かれた状況を語る歌として、
翻訳してみたい。

いや、本当を言うと、わたしはただ、出だし
に度肝を抜かれたのだ。

向かいの歩道で女の子が笑ってる
その白い歯を見たら腹が減った
ぼくはパン屋へ走って小さいパンをひとつ
買った

バターを塗りながらお百姓さんを思う

百姓だ、たちまち心は決まった

そう、行こう、行くんだ、農村へ

農家に若いぼくの十年を捧げよう

彼らの運命を、きつい畑仕事を知らう

恋でもはじまるかと思えば、白い歯、空腹、
パンにバター、農家の境遇、である。突飛なよ
うで、でも、ある日、ある個人の身に起きた具
体的な出来事として、妙な現実味があり、一気
にこのあとの成りゆきに引きこまれていく。こ
れこそが物語だ、とわたしは思う。

この物語は、連想ゲームのように、節の最後
の語を、次の節の冒頭で引き取るかたちで進ん
でいく。

そう、ここらの畑は連中の大農場とは大違い
犁もなければ、やる気みなぎるトラクターも
ない
夜明けから斧を使って進み、それから焼く
眺めて楽しむためじゃない、コーヒーを育て
るためさ

コーヒー、そうコーヒーなんだ、驚くなかれ
コーヒーは競争力に欠けると友人諸氏はぼ
くらに言った

それでも夜がくれば獣を追い払わなくちゃ
いけない

盛大に火を焚き、樽を叩いて

「連中」とは、旧宗主国側の人間だろう。「友
人諸氏」も、そうかもしれない。焼畑により栽
培されるのは、なんと、パンをつくるための小
麦ではなく、コーヒー。植民地時代、国内の暮

らしに必要な作物ではなく、宗主国向けの嗜好品ばかりを大々的につくらされ、独立後も、割に合わないその仕組みを抜け出すのが難しい、そんな実情を皮肉っているものと読める。

さて、次の節では、この「樽」は、実は選挙のときに誰かがくれたワインが入っていた樽だという。買収が当たり前の腐った選挙。そして、夜更けに、その樽を叩いて「ぼくら」が踊っている……

「踊るのをやめろ、汚ねえニグロどもめ、やめろ！」

探鉱者だ、肉屋だったのが鞍替えした

金の鉱脈があるんだぞ、とゲス野郎はぼくらに説く、

おまえらが何世代も踊ってきた、その下に

「ゴー・ホーム、汚ねえ入植者め」とぼくは

即答

そこでやつはぼくを知識人と見てとった

「しーっ」とクズは言った、「おれは黒十字の者で

黒人の利益のために活動中——あとで手紙を送るから」

ガボン、は、アフリカきつての産油国で、マンガンも主要輸出品、金鉱もある。言うまでもないことだが、ガボンにかぎらず、アフリカは資源豊富な大陸で、「貧しい」のは資源がないからではなく、その利益が正當に一般市民に還元されないからだ。現地の労働者を、踊っているだけの「ニグロ」と蔑みつつ、資源を奪おうとする入植者は、実は人道支援団体らしきもの（「黒十字」は赤十字のパロディだろうか）の関係者で、相手の「ニグロ」が英語もフランス語も話すインテリと見るや、懐柔にかかす。

手紙を？ やつは約束を守り、じきに手紙を送ってきた

「時節柄ますますご健勝……貴殿を顧問に

任命します」

さらば豚に牛、ぼくは向こうへ戻る
お偉い方々が草をはむ公の場の片隅へ

顧問？ 少々驚いたが、結局

慣れるものだし、言っておくが署名するのは
上手いんだ

けれども金の鉱脈は尽き、友情は涸れる
あつという間に任期切れ、予算削減だとき

向かいの歩道で女の子が笑ってる

その白い歯を見たら腹が空いてきた

ぼくはパン屋へ走った、よき愛国者にふさわしく

ところがパン屋はいなくなってた、もうじき
代議士になるそうだ

奇妙な成長物語は泡と消え、気がつけば振り出しの歩道、あれは一瞬の夢だったのか……と思いきや、パン屋は消えている。民衆の生活がなおざりにされ、能力のない者が政治を動かす世の中は、幻の彷徨のあいだにも、しつかり進行していたのだ。

半世紀前の歌だが、状況が変わったとは、あまり思えない。一体、世界はなにをしてきたのか。女の子の笑い声が耳に響く。

Le trottoir d'en face

Paroles et musique : Pierre Akendengué

Pierre Akendengué, *Nandipo*, Saravah, 1974.

ピエール・アケンダンゲ『アフリカ・オボタ／ナンディポ』オーマガトキ、一九九七年。

Par les damnés de la terre. Des voix de luttes
1969-1988, Compilé par Rocé, Hors Cadres, 2018.

松山晋也『ピエール・バルーとサラヴァの時代』
青土社、二〇一七年。

『ビザンチウムへの旅』の方へ

追悼 新倉俊一

樋口良澄

新倉俊一氏が亡くなった。

西脇順三郎研究の第一人者であり、この『Spectrum』への旅」に深く関わる方でもあるので、ここで追悼を込めて最後の詩集『ビザンチウムへの旅』(洪水企画)について触れておきたい。新倉氏は、英文学者としてパウンド、エミリー・デイキンソンら英米詩の翻訳・研究に大きな成果を残し、何よりも西脇を語るには新倉氏の仕事は不可欠の存在だった。私の『スペクトラム』への旅」も、西脇をめぐる氏の批評や翻訳、テキスト校訂の枠内を逍遙しているにすぎないのかもしれない。連載をまとめたあと、真っ先に読んでいただこうと思っただけに、残念でならない。

「遺族から『ビザンチウムへの旅』という詩集をいただきたい。ご本人が最期の仕事として、手を尽くしたと伺った。

カパーには白地に、ギリシャ、トルコ、地中海の地図が青で印刷されている。この青から、地中海の青、そしてビザンチウム／イスタンブールで、マイルやナザール・ポンジュと呼ばれる眼をあしらった魔除けの装飾品など、偏愛されている青を思い出す。「ミテ」に連載を始める前に相談に伺った新倉氏の仕事場は、葉山の海沿いにあり、太平洋を見渡せた。葉山の海と、地中海はつながっている。そしてギリシャ、ローマ文明は氏が研究してきた英米文学や西脇の原郷だ。そうしたパースペクティブがこの詩集の原景にあるような気がする。

詩集は、表題作のほか、連作詩「冬の旅」、同「ヘレニカ」、回想的エッセイ「詩人の曇茶籠」が収められている。新倉氏は晩年に至り、堰を切ったように詩を書かれた。数年前から毎年のように詩集を出され、「冬の旅」も「現代詩手帖」に時おり発表され、切実な生を、伸び伸びとした言葉の流れから浮かび上がらせる手法に、どちらかという緊迫感を抱いていた。「冬の旅」はシューベルトの歌曲を思い出しはするが、もちろん中国の思想でいう「玄冬」、老年期を冬とした視点からきているのだらう。老齢の現在に、過去の記憶、知的な逍遙、人や土地の手触りを交錯させ、新倉氏の生涯を言葉で集成するような試みだと思っ。

しかし、過去を回想するだけの詩集ではない。タイトルともなった巻頭の長編詩「ビザンチウムへの旅」は、一種の幻想詩だ。それはこんなふうに始まる。

終わった時から始まる

秘められた夢の旅

たとえば船室のような部屋に

飾られた一枚の海図

それが揺らめいて

光に映える水面となるとき

笑いさざめくエーゲ海の

まぶしい朝の中にいる

エーゲ海からギリシャ、トルコの島々を過ぎ、そしてビザンチウムへ至る旅。ビザンチウムは東ローマ帝国の首都として栄え、その後トルコに征服され、現在はトルコ領だ。連作「ヘレニカ」もギリシヤ的なものをモチーフにしており、関心の在りどころを示している。

詩篇には西脇順三郎やイエイツが登場し、夢の旅はまた生涯の軌跡でもあった。イスタンブールを出て海を渡り、ゴート人支配時代に東ローマ帝国の総督府がおかれたイタリアのラベンナへ向かい、さらに旅を続けようとするところで詩は終わる。生死を越えた、清明な視点が読む者を包む。

この長詩が巻頭に置かれ、全体が「ビザンチウムへの旅」として一書としてまとめられることで、詩集全体が未来に向けた旅のように読めてくる。「冬の旅」や「ヘレニカ」も、生死を超えた旅に接続し、未来に向けて飛翔するかのようだ。

そうした旅を見届ける中で、内奥を知らせる言葉に出会う。たとえば「詩はあいまいな感情／でなく正確な思考だ」「(アプロ)」。新倉氏の詩の研究はそうした厳密なものだった。西脇をめぐる仕事を追いかけているとそれがよくわかる。「ミテ」を毎号お送りし、ときには初歩的な誤りを指摘され、冷や汗の出るような思いもした。

しかし、その厳密さは息苦しいものではなかった。

「略唯一人／冬の旅を続けている／もう学問も研究も忘れて／ただ白露の下に眠る／宿根の蒼白な桔梗を／密かに探しているだけだ」(「桔梗」)

このような境地に至る自由さを、備えていたように思う。「冬の旅」の中に、深い関わりがあったわけではなかった須賀敦子との縁をめぐって書くところがある。思いついて生年を調べると、新倉氏は一九三〇年、須賀は一九二九年、同世代だ。自身の研究と詩作を、同じ外国文学者の須賀が五〇代半ばからエッセイの書き手として活躍し、六九歳で亡くなった生涯の仕事と重ねて考えることもあったのだろうか。

人の一生は長いのか、短いのか、誰に分かるだらう。黒田喜夫に「生涯のように」という未完の自伝的エッセイがある。自伝を、その生涯のように書く、というのが本来の黒田の意味なのだらうが、その言葉が私の中で一人歩きして、最後に振り返って見ると《人はその人の「生涯のように」生きる》と思うようになった。

新倉俊一氏はその生涯のように時を送り、最後に『ビザンチウムへの旅』という清明な詩集を我らに遺された。

調子者とそのせりふ

—唐十郎ノート番外編4

新井高子

映画『東北おんばのうた——つなみの浜辺で』の入選は、山形国際ドキュメンタリー映画祭「アジア千波万波」部門へ、世界じゅうから八〇〇作以上の応募があったなかから、最終の一八作に残った成果なのだという。なんとも幸運なこと。

わたしの拙い批評をながくご覧の読者はお気付きかと思つが、そもそもおんばの土地ことばに夢中になつたきつかけのひとは、唐十郎さんなのだった。唐さんは、純度の高い「声」のことばでその戯曲をしたためる。じつに愉快な掛け合いがそこにはあり、さらに、皮肉や微妙なズレ、反語的なせりふ返し、リズムカルな韻律も豊かだ。書きことばによる文学作品とは、質の異なる含蕃が声の世界にはどうやらあつて、けつきよくわたしは、そういう込み入つた声々に囲まれながら、それを探っていたのだった。

思えば、生まれ育つた桐生の祖母や両親、女工さんなども、そんな声の使い手だった。とはいふものの、じつはわたしじしんは上州弁は下手だった。町工場地帯の優等生だったわたしは、宮沢賢治の『どんぐりと山猫』の「二郎」くんのようなところがあつて……。

だが、不思議なことに、かなりきつい上州女(いや、それがどういふものかよくわからない気もするのだが……)に、どうしてもなつてしまふ相手がいた。そのひとの前だと、口の糸が引つ張られるように、土地の響きで面白おかしいことを言い放つてしまえる。

柿の実が熟す秋になると思い出すそのひとは、サワさんと言う。唐戯曲や大船渡のおんばの賑やかさに惹かれるわたしの原点のひとつかもしれない。今回の番外編は、唐さんからはちよつと離れるが、そのひとのことを綴つてみたい。

織物関係の小さな下請け工場を営むサワさんは、桐生の同じ町内に住んでいた。父の友だちだが、いくらか年齢は上だった。わたしのうちには自転車に乗つてしよつちゅう遊びに来ていた。来れば、何時間も茶の間で父とオダを上げる。ちよつと政治がかつた四方山話を血気さかんにすること。「オダを上げる」と、うちのほうでは言つていた。

サワさんは市会議員になる夢をもつていた。地元の政治談義が好きな父とそれで話が合つていたのだが、議員になつたら抱負より、すでにある票田にどう割り込むか、無い袖から選挙資金をどう作るか、現職議員のゴシップも含

めて、仮定といおうかと架空といおうか、つまるところは立候補を夢見るホラ話が、「どうすんべえ」「ああすんべえ」の上州弁で、大笑いとともにえんえんと交わされていた。

かと言つて、まんざら本気でないわけでもないらしく、サワさんのオダはそのまま何年も続いた。思えば、当時の大人にはそういう一種、稚氣じみたふるまいも許されていた気がする。ところで、わたしのほうは小学生から中高生になり、そんなマセはじめた目からしても、お調子者で風采の上がないサワさんは、到底、議員に受かりそうになつた。そして、試験の成績だけはよかつたが、「たあちゃん」は忘れモンの名人」が口癖の祖母に世話になりつばなしで、同じくうっかり者のわたしは、サワさんと妙にウマが合つてもいたのだった。

四人兄弟の三番目だが、妹がいるので「おねえちゃん」と女工さんたちに呼びかけられることは珍しくなかつた。だが、サワさんからそう呼ばれると、親子ほど年が離れているにも関わらず、ほんのいくらかは弟分のような、子分のような感じがした。どういうわけか彼の前では、なんとなく威張つたような口調が、わたしはしやすいのだった。その妻に対してどうだったかわからないが、少なくともわたしに対しては、敢えて下手(したて)に出るのがサワさんは絶妙にうまかつた。

上州に気が強い女が多いとしたら、そのようにやんわり仕立て上げるのが上手な男がいるような気がする。うまく言えないのだが、サワさんはわたしにとっては不思議な土着的フェミニストだった。気を利かせて先にドアを開けるような身のこなしは全くできないが、「冗談を言いながら、さりげなく、ちよつと情けなく、そうしてわたしを立てようとしてくれていた。妹はまたべつなひととウマが合つていたようなので、こういう相性はじつに微妙なものだと思ふ。

わたしたちのやりとりはこんなふうだ。例えば、東京の大学に進んだわたしが、夏休みに帰省してしばらくぶりに会うと、

サワ…おつ。東京の水に洗わいて、おねえちゃんも、ちよつとあ、きれいになつたんか

タカ…なアに、水もなにも東京じゃ、まいんちまいんち雨つぶりだよ、ズブ濡れだよ、猫も杓子も美人のたまごも。

サワ…あなたさまに一本、お傘を、と差しかけるいい男は見つかんねえのか

タカ…見つかつてりゃア、お天道サンサンの夏休みに、こんなトコにいるわきやねえがん！

そして笑う。サワさんの前だとわたしはしぜんに高飛車になる。桐生にいるときでも、ふだんはけっこう流暢なハイカラ弁(大船渡のおんばたちは標準語をそう呼ぶ)で、慎ましいやりとりをまともにしていたのだから、このような波長を投げかけることができる彼は、特別なひと。あたまで考えたんじゃなく、ことばのリズムやからだの抑揚にたまたま乗るだけで、可笑しな喩えや掛詞的な言い回しが即興でするする出てくる。失礼ぎりぎりなことを言っても、お互いにべつに怒る気にもならない。

民俗学を専攻していた頃、「冗談関係」というテーマがあることを知ったが、なんだかそれに似ている。わが家の場合、父も上州弁まる出しな男で、もちろんそこそこの冗談を互いに言い合うが、ここまでではない。たぶん、父では近すぎるのだ。血縁があるうがなかるうが、いくらか距離のある「おじさん」的な親しさが冗談関係には合っているのかもしれない。

そしてそのような関係が導く掛け合いは、いわゆる近代的なりリズム表現から逸脱しているのは言うまでもないが、さらに何とといったらいいか、喩はあっても喩はないような感じなのだ。喩とというのは、まともなことばや書きことばが抱えるある種の「常識」空間が前提にあつて成立するものじゃないかしら……。このようなお調子者としての快樂的な掛け合ひでは、その前提がない。感覚として、もつと素早くて妙にスツパ抜けている。なにがホントか考える暇はないのだ。このあたりはいずれ深めると面白そうだが、狂言などの喜劇的な古典芸能、滑稽本の声とも通底しているだろう。

閑話休題。柿の一件は、新井家の経済危機、敷地のほとんどが競売に掛けられて更地になったときのことだった。屋敷森と竹藪があり、庭と裏庭があり、畑や草ツ原があり……。工場と自宅の一角だけは辛うじて残ったが、小学校ひとつぶんくらいの緑地に重機が入って、大木も灌木も根こそぎになった。じつは震災後の東北への関わりはこの更地体験に導かれてもいるのだが、さすがのわたしも当時はひどく憔悴し、その秋の日、変わり果てた実家のまわりをぼんやり歩いていた。この時期になると食べきれないほどなつた柿の実が、もうひとつも手に入らないことなどを思つて泣きそうになっていた。

すると折しも、痩せつぼちのサワさんが自転車に乗ってくるのが見える。あちらもわたしに気付く。そうして、ふらふら漕いで、横でブレーキを掛けると、「おねえちゃん、こんなことになつちまつたんべえ。おれなあ、おつかなくて、おつかなくて、行げねえんだよ、おめんちに。おかみさん(祖母のこと)に挨拶もできねえ。」と、薄くなったあたまをハンドルに垂れて乗せ、しよぼくれている。地域の旧

家でもあつたわが家の崩壊は、近所じゅうの噂にも事件にもなつていた。寄り付かないひと、寄り付けないひとがあるのも当たり前だったが、大掛かりな土木工事を恐怖してお化け屋敷のように「おつかない」と正直に打ち明けてくれるサワさん。このひとは、こんなときでもわたしを気丈にさせる。それを聞き、まるで作用・反作用のようにこんな啖呵が飛び出した。

「なにがおつかねえだ。たたみ一畳ありやア、寝たり起きたりできるんだ。変わんねえよ、人間は。それよかな、うちの百目柿が大好物だったんだ、あたしは。工場(こうば)の屋根に上がって、シヤリシヤリシヤリシヤリ齧つて、種スツ飛ばして。たわわの大木が何本だつてあつたんだ。それがこのザマだよ。おめんちのうんたら柿でいいからもつてきて、挨拶しろイ。」

うんたら柿とは、さして甘くもないのに柔らかく、しまりの悪い柿のこと。勢いに乗つてつい出てきたが、わたしのあいかわずの口振りを、むしろほっとした様子で聞いてくれるサワさん。そんなふうには威張つてみせることで、じつはこちらもようやく元氣ぶれたのだ。けつきよく、わたしの首根をしっかりと据わせたのだから、励ましてくれたのである。

そうして翌日、わたしの留守中、サワさんはレジ袋いっぱいその柿を、「おつかねえおねえちゃんに、やつてください」ともつてきた。かつてと同じように、ちよくちよくうちに遊びにくるようにもなつた。

そして翌年もその翌年も、実るともつてきてくれた。わたしのために腕いだその柿は、祖母が受けとつて箱詰めしていた。ある秋も同じだった。また来たか、とわたしは思った。ところが翌夕、電話が鳴つて、「今朝、サワさんが亡くなつたつてよ」。脑梗塞でぼっくりだった。

その実を頬ばりながら胸が震えた。啼泣したのは言うまでもなく、それでも心のなかで精一杯、わたしはウソぶいてみせるのを忘れなかった。「なんだい、最後の最後ンなつて、深妙に詠えやがつて。よけいに甘みが抜けるじゃねえか、おめんちのうんたら柿が、目の汐汁で!」。わたしたちのつきあいでは、そんなカラ元氣が、永い旅路に捧げるなげなしの手向けでもあつて……。

唐十郎の戯曲を読んでいると、これはあたままで考えたんじゃないな、ノリで書いているなと勘付くせりふが豊かにある。声のリズムに導かれておのずと出てきた、愉快で複雑で、時に哀切でもあるせりふ回し。ほんの片鱗ながら身に覚えがあることを、サワさんの顔を宙に浮かべながらわたしは思い出す。土地の「調子者」というのは、暮らしのなかの芸能者、はじまりの吟遊詩人かもしれない。